
冥界の犬の死神は、暇

キッチンタイマー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥界の犬の死神は、暇

【Nコード】

N57180

【作者名】

キッチンタイマー

【あらすじ】

冥界、真っ暗な空間のただ広い世界

そこには水晶玉と犬だけがただ暇そうに暮らしている。

……れ……あれ？

目を開けると、真っ暗な空間だった。

私は体を起こし、辺りを見回した。

少し離れた所に犬がいる。

真っ暗やみの中にただそこに座っているのは片耳の垂れた柴犬だった。

暗闇の中でもしっかりとその姿は見える

水晶玉を覗きこんでつまらなそうな顔をしていた。

「あの……私は一体……」

「菊田 菜奈^{きくた なな}、まだ若いのに自殺とは……情けないのお……」
こちらを向かずに犬は私の名前を呼んだ。

「え、あの私は」

「高校にせっかく受かったというのに、なかなか頑張ったのじゃろう？」

私は犬が当然のようにしゃべっていることに突っ込む暇もなく話を勧められている。

そもそも、何故この犬は私が何をしたか知っているのだろう。

「虐めか？ あの手のは少し無視をするか勇気を持って一言いえばよからう、まあ、一人では人間とは言え弱いからのお……大人を見方に付けるとか、もう少し工夫出来んのか？ 大人に言ったらもっと虐めると言われようと、人間界らしく言うത്そうじゃの個人質に取られたから警察に通報せずみすみす金だけ渡す奴もいなかろうて……ん？ 分からんか？ 人間界の者に伝わるように言っただけじゃが……難しいのお……全く複雑な世界を作りよってあの馬鹿！」

私はそこまで言われると、急に感情があふれ出てきた。

「……仕方ないじゃない！ 私の味方は誰もいなかったんだから！」

そんな簡単に行くはずがない、それがいじめだ
犬なんかに分かるはずが無い。

気が付いたら涙声になっていた。

今までこの気持ちを抑えきれて普通に声を出せていたことが不思議
なくらいだ。

「まあ、今更何を言ってもわしにはどうにもできん、お前さんも味
方と感ずることのできる人間は近くにいなかった、あやつも魂をコ
ントロールするのはそう簡単ではないと言ってやった」

犬は毬でもつつくように水晶玉を叩いた。

「その水晶玉、何？」

「人間界が見えるんじゃ、見てみるか？　まだお前さんも存在しと
るようじゃからのお」

「私は……存在してる」

そう呟くと

私は自分の手を見た、確かにそこに私の見慣れた手がある
触ってみても、確かに自分の手だ。

「私はまだ存在してるの？」

今度は犬に聞いた。

「そうじゃ」

でも犬の反応はそっけないものだった。

「もう少し何か無いの？」

私は少し強い口調で犬に言ってみるも

「死んだ者には何もないそれは当然のことじゃ、天国とか地獄とか
言っとなるようじゃが仮に死んだものが全てあの世に残っていたと考
えてみい、そんなに魂の入る世界があったら見て見たいわい」
軽くあしらわれてしまった。

「じゃあ、私は消える？」

犬の方へ二歩ほど近寄ったはずだったが、距離が縮まらない。

「そうじゃのお」

「どのくらいで？」

もう二歩近寄るが、やはり縮まらない。

「知らん」

どうやらこの質問を続けていても何も進展しないようなので私は質問する方向を変えることにした。

「……そもそもあなたは誰？」

「うゝむ、人間界っぽく言うんじゃない死神、で分かるかい」

「し、死神？ 柴犬が？」

「わしは秋田犬じゃい」

秋田犬と柴犬の違いなんて良くわからない

「どっちも一緒じゃないの？」

「ちがわい、わしの方があやつよりがっしりしてモフモフじゃろうが」

確かに、ツンツンしていると言うよりはふわふわな見た目だ。

「そのもふもふ秋田犬が死神？」

「そういうことじゃ、まさかわしにこの役目が回ってくるとは思わなかったが」

「じゃあ私が死ぬように仕向けたってこと？」

犬は水晶玉から手を離しこちらを向いた。

「なんでそう悪い方にばかり考えるんじゃ……お前さんの思い浮かべた死神が何かは知らんが意図的に殺すなど無理じゃ」

私はその場でしばらく考え込み、犬に聞いた。

「あなたも私と一緒に一人なの？」

「わしは今一人、いや一匹じゃがお前さんは違うじゃろ」

「私も一人よ」

「いや、お前さんは一人ではない」

「わしがいる、とでも言うつもり？」

私は、セリフを先取りした気分になった

でも、犬は当たり前のように

「わし以外にもいるじゃろう？ 思い当たらんのか？」

そう私に聞いてきた。

私は決めつけたような口調に少しカッとなり

「一人じゃなかったら私は死んでない！」

思わず怒鳴ってしまった。

しかし、犬は怒鳴り返してくることなどなかった。

「一人じゃなかったらそもそもお前さんはわしと話すことすら叶わん」

「どういうことよ？」

私も、気持ちを落ち着けて聞き返す。

「そもそも、脳みそも無いお前さんが何故にわしと普通に話せると思っておる」

「……そういえば、なんで？」

「お前さんがまだ生きているからじゃ、誰かの魂にお前さんが残っておらんかったらお前さんは今頃跡形もなく消え去っている」

「私が……まだ生きている？」

「そして、わしも生きておる」

「あなたも、誰かの魂って言うのに残ってるの？」

「ハチ、という名前は聞いたことが無いかの？」

……まさか

「ハチ公？」

思わず声に出た。

「おお、当たりじゃ、お前さんもしっとるんじゃのお」

犬は嬉しそうに頷いた。

「銅像が駅の前にあるからね」

「死んだら真っ先にわしを待ちぼうけさせたあやつを怒鳴りつけるつもりだったんじゃが……」

犬は俯き、ため息をついた。

「まだ飼い主に会えてないの？」

「なんかのお……しばらく消えそうにないからと毎日暇な仕事を押し付けられた訳じゃ」

はっはっはっ、と水戸黄門のように笑った。

「全く神様とやらは面倒な世界を作ったものじゃのお……」

そこまで話すと話題が尽きたようで、しばらくお互いに何も口にしなかった。

「私はこれからどうすればいいの？」

「好きにせい、わしにはお前さんに指図することは無い、消えるまで自由じゃ」

「でも、動けないし」

右や左に動いたが、案の定全く視点が変わらない
目の前に犬が居るだけ、近づけるわけでもなく遠ざかれない。

「ん、そんなはずはなからう」

「そんなこと言ってもほら、無理だって」

私は横にスキップしたが、視点が動かない

「はて……」

「やあ、また来たよ」

犬と私が考え込んでいると、一人男の子がどこからともなく現れた。
見覚えのある制服を着ている、ってことは高校生か。

「またお前さんか……いい加減死ぬぞ、前はトラックにはね飛ばされたんじゃないっけか？」

「良く覚えてるね……僕としては忘れたいんだけど」

「今度はなんじゃ」

「女の子に襲われた……」

「……女子おなごに殺されるほど男はひ弱になってしまったか」

「まだ死んでないから」

男はそう言いながらその場に正座した。

「分からんぞ？　ここに来ている時点でお前さんは死にかかったらしばらくその二人は話し合っていた。

私の入るタイミングなど全くない。

話がひと段落付くと

「あ、意識が戻るかも、じゃあまたね」
そう言って立ち上がり犬に手を振った。

「もう二度と来るな！ お前さんが死んだ時は閻魔様にわしに酷い迷惑をかけたと」「じゃ、また」

結局おじいちゃんと孫のようなやり取りをした末、男は消えてしまった。

「ねえ、今のどういうこと？」

しばらく流れていた沈黙を破って私が犬に話しかけた。

「奴はもう何度もここにきては帰っていつとる、本当にここが冥界なのか疑いたくなるわい」

「あの子はどこに行ったの？」

「うむ、質問に答えたら……教えてやろうかの」

「質問？」

「そうじゃ」

「お前さんは、このまま死にたいか？ それとも……もう一度生きたいか？」

「何それ、私はもう死んでるんでしょ？」

何を今更、という気持ちになった。

「お前さんは正確には、まだ死んでおらん、生死をさまよっておる」私は黙って聞くことにした。

いや、突然の宣告に声が出なかったかもしれない。

「お前さんには味方がいる、それは今お前さんがいることで証明されているしかし、その味方はお前さんもわしも知らん、もしかするとまた虐めに会うかも分からん、それでも……生きたいか？」

またあいつらの顔を見ないといけない、でも味方はいる、誰？ 分からない

このまま死んだ方が楽？ 分からない、分からない……

「どうする？ お前さんの自由じゃ」

「私は……」

その後、月日が勝手に流れていく暗闇の中、秋田犬は水晶玉をのぞき込んでいる

ため息をつくど、体を反らせて伸びをした。

「やあゝ元気してるかい？」

レディーススーツに身を包んだ、二十代くらいの女性が秋田犬の目の前にふわりと現れた。

「お前さんのせいで毎日暇じゃ……全く、何故にこんな世界を作ったんじゃ」

「見てて面白くないかい？」

女性はしゃがんで秋田犬と視線を合わせるが

「まあまあ、じゃのお」

犬の方はただ水晶玉を覗きこんでいる。

「うん？　ずーっとその子見てるねえゝ誰？　知ってる子？」

神様も水晶玉を覗きこんだ。

「前に一度だけ会ったことがあるんじゃ、なんか知らんが、自害しそうな人間を救う人間をやっとるそうでのお」

「ふゝん、面白い？」

「……まあまあ、じゃなあ」

「そう言わないでよゝ」

犬の背中をポンと叩き耳をつまんだ。

「お前さんのせいで、わしは未だ飼い主にも会えずこんな暇な事をしておると言うのに……なんで冥界と下界の中間など……」

ぼやくだけで何も反応が無いのでおとなしく手を離し。

「良いじゃないかゝめったに生死の境目を彷徨ってる人なんて来ないんだからゝなんなら明日飼い主さんに会うかい？　出来ないことは無いよ？」

「こやつが死んだらにするわい、今度はあやつの待つ番じゃ」

指差すように水晶玉に前足を向けた。

「飼い主さんをあやつ呼ばわりかい？　まあ、そう伝えておくよゝ」
神様は手を振ると、どこかへ消えてしまった。

今日も暗闇の中では犬が一人、水晶玉を覗きこんでいる。
しばらく楽しそうに水晶玉を眺めていた。

「あれ……俺は一体……」

「栗原 正幸、階段から落ちるなど……ドジじゃのお……」

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

最初はバッドエンドっぽくなる感じだったのですが

気分が暗くなったので、無理矢理路線変更いたしました。

ゆえに、不自然な点などあるかもしれません。

面白かったと言う方、誤字脱字発見という方、その他ご意見のある方は一言でも良いので感想を書いていただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718o/>

冥界の犬の死神は、暇

2011年10月7日23時31分発行